

日本史ブース 若手 3 研究者の発表内容紹介

(1)道上祥武（大学院後期博士課程 2 年次。日本学術振興会特別研究員 D C）

「集落遺跡にみる古代の日本」

古墳時代から飛鳥・奈良時代の畿内地域をフィールドとして、当時の人々の居住痕跡である集落遺跡を取り上げる。集落遺跡の消長、分布、構造などから人々の生活を復元することで、日本古代社会の特質について論じる。

(2)徳満 悠（大学院後期博士課程 3 年次。日本学術振興会特別研究員 D C）

「中世都市・宇治と茶商人」

京都近郊に位置する都市・宇治を取り上げ、戦国時代末期から江戸時代初期にかけての領主支配・商業・都市共同体などの変容を探る。宇治の特産品である茶とそれを扱う商人の活動に焦点を当て、課題へのアプローチを試みる。

(3)北野智也（大学院後期博士課程 3 年次。日本学術振興会特別研究員 D C）

「近世後期大坂における砂糖の流通」

江戸時代には嗜好品であった砂糖が大坂でどのように流通したのかを、取引の担い手であった商人のあり方と幕府による施策との関係から論じる。

日本史ブースでは、上記 3 名にそれぞれ 20 分程度の報告をしてもらいます。これを、3 回くりかえして行う予定です。

この他、日本史研究室で毎年開催している合同調査（和泉市教育委員会と共催）についての紹介などを行います。